

2013 年度 第 5 回 全体研究会 アジアで活躍する仏教指導者（第 3 回）

- 報告題目：地域とお寺の良い関係
- 開催日時：2013 年 11 月 7 日（木）10：45～12：15
- 場 所：龍谷大学大宮学舎東翼 101 教室
- 報告者：白山義章 師（浄土真宗本願寺派 浄運寺住職）
- コメンテーター：藤 能成（龍谷大学文学部教授）
- 参加者：81 人

【報告のポイント】

白山師は、ドイツの「恵光」日本文化センター及びヨーロッパ仏教伝道協会にて勤務した後、日本に帰国し、自坊において様々なイベントを行い、寺院と地域の良好な関係を築いている僧侶である。寺院が地域との良好な関係を築く上で、地域と密着した学校運営を行うコミュニティ・スクールが参考になると白山師は述べた。

【報告の概要】

コミュニティ・スクールは地域運営学校とも言われ、学校運営協議会を設置した学校のことである。学校運営協議会は学校・家庭・地域の代表により構成され、学校運営の方針や問題点を話し合う。学校運営協議会は校長の学校運営方針を承認し、教育活動・人事に意見することができる。この仕組みによって、学校・家庭・地域が一体となってより良い教育の実現に取り組む事ができる。

具体的な取り組み方法としては、目標別方式と立場別方式の二種類がある。目標別方式とは、例えば、体力・学力・社会力の向上という各目標に対して学校・家庭・地域の代表が話し合う方式である。しかしこの方式では結局、教員の負担が大きくなりがちである。もう一つの立場別方式では、学校・家庭・地域がそれぞれの立場で目的を達成する為の方法を考える。この方式では、学校・家庭・地域三者がそれぞれ自発的に取り組むことができ、最終的には三者が問題点を共有し共働することで「わたしたちの学校」という意識が芽生えてくる。それがひいては住みよい町づくりにつながっていくのである。

以上のコミュニティ・スクールの事例を寺院に置き換えたとき、寺院と地域を考える良いヒントになる。白山師は、地域の人々が参加できる様々な文化教室を開いているドイツ・「恵光」日本文化センター、西本願寺鹿児島別院で開催された「Bouz Meets Fes」、福岡県秋月の浄覚寺で開催された作品展「あしあと」というイベント、多くの若者が集まるネパールカトマンズ本願寺、「おてらんち」として薬膳料理を提供する福岡県の一心寺、同じ町内の8ヶ寺が協力して年3回設ける子供のつどい「なかがわキッズサング」、毎年開催されている花まつりが地域の行事として定着している自坊の事例などを挙げつつ、寺院は地域のコミュニティセンターであるべきだと主張する。地域の人々・門徒（檀家）・僧侶が問題意識を共有し、「わたしたちのお寺」という意識を高めることが、よりよい寺院、ひいては、地域の人々が安心して暮らせる町づくりにつながると述べた。

【議論の概要】

藤能成氏は、「寺院は門徒・檀家だけのために存在する」と考えている保守的な住職・門徒・檀家が、どのようにすれば意識改革ができるのか、地域に寺院を開放するにあたり何を念頭において進めていけばよいのか、また寺院で行事を開催すれば一時的に人が集まるが、そのことが寺院における伝道にどう結びつくのか、について質問した。また、行事を行うことと、寺院の存在意義や仏教の伝統との関係についても検討して行く必要があると述べた。

それに対し白山師は、寺院のあり方を変えるなどの寺院運営においては、住職一人で抱え込まず、例えば真宗の場合、門徒推進員などの立場の人と共同で行う方がよいと述べた。また、白山師がドイツのハノーバーで宿泊したベトナム寺院では、多くの人が出入りし、宿泊場所・食事も提供していた。そのような寺院が理想であるが、日本の寺院には住職一家が住んでいるため一般の人が入りにくいという特徴がある。防犯上からも常時開放というのは困難である



が、逆に一般の人が多く入ることによって人の目につきやすくなるなど、メリットの方が多い。これからは自坊のことだけを考えるのではなく、よりよい町づくり、地域づくりの手助けをして行く寺院のあり方を考えていくべきだと述べた。